

2021 東京・青森 5 日間の旅

右城 猛

1. まえがき

2021 年 8 月 4 日(水)から 4 泊 5 日で、東京と青森を夫婦で旅行してきた。

青森は 2004 年の「ねぶた祭り」に合わせて、3 泊 4 日で旅行したことがある。技研の鷲尾社長に津軽半島龍飛崎方面を案内してもらった。

今回は、JTB 高知支店が手配してくれた北星交通株式会社のハイヤーに乗って観光地を巡ってきた。

2. 旅程

8/4 (水)	高知空港 7:35→(ANA565)→羽田空港 8:55 築地本願寺見物、浅草木馬館大衆演劇 浅草ビューホテル泊
8/5 (木)	東京駅 9:36→はやぶさ→新青森 12:34 三内丸山遺跡、八甲田ロープウェイ、城が倉大橋 16:00 八甲田ホテル泊
8/6 (金)	ホテル発 8:30 出発、奥入瀬(焼山⇒石ヶ戸⇒子ノ口)、十和田湖遊覧船(子ノ口⇒休屋)、発荷峠展望台、小坂町 15:10 大罌温泉 星野リゾート界津軽
8/7 (土)	ホテル発 8:30 出発、猿賀公園、盛美園、黒石中町こみせ通り、文豪太宰治出身地金木 斜陽館、旧津島家新座敷、南台寺、五所川原の立倭武多の館、鶴の舞橋、岩木山神社 16:30 弘前市内アートホテル弘前シティ
8/9 (日)	ホテル 8:30 発、弘前公園、旧第五十九銀行本店本館、旧弘前市立図書館、旧東奥義塾外人教師館、金剛山光明寺最勝院、弘前 10:40→青森空港 11:30、昼食、ショッピング 青森空港 13:05→ANA1854→伊丹空港 15:00 伊丹空港 15:30→ANA1611→高知空港 16:15

3. 築地本願寺

羽田から京急で東銀座まで行き、荷物を駅のコインロッカーに預け、真夏の炎天下を東本願寺まで歩く。

築地本願寺は、親鸞上人を宗祖とする浄土真宗のお寺である。元々は浅草にあり、「浅草本願寺」と呼ばれていたが、1657 年の「明暦の大火」で焼失したため、海を埋め立て現在の場所に本堂を移転させたことから、「築地本願寺」と呼ばれるようになったとされている。

現在の本堂は、関東大震災で焼失した後の 1934 年に、東京帝国大学名誉教授・伊東忠太博士の設計によって再建されたものである。日本の寺院とは異なるオリエンタル様式のデザインになっている。

私が築地本願寺に興味を持ったのは、安永雄彦著『築地本願寺の経営学』を読んでからである。築地本願寺の代表取締役社長と言うべき宗務長をされている安永氏は、銀行マン、経営コンサルタントなど異色の経歴を持っている。

本堂の中には椅子が並べられ、教会のような雰囲気である。冷房がよく効いていたので、椅子に座って休憩した後、家族の健康や会社の繁栄を祈願して参拝した。



伊東忠太博士の設計による築地本願寺



レストランがある第一伝道会館の入り口



「天せいろそば」を食べる家内

第一伝道館の中にある日本料理「紫水」で「天せいろそば」(1300 円)を食べる。食後にアイスコーヒーのサービスがあった。

インフォメーションセンター内では、仏教関係の本が販売されていた。松原泰道著『仏教の言葉で考える』、ひろさちや著『学校では教えてくれないは宗教の事業』の2冊の文庫本を購入する。

4. 浅草ビューホテル

東銀座駅からはタクシーで浅草へ移動し、15時にホテルへチェックインする。

今回の旅行を決めたのは、6月に大和ハウス工業から東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の観戦招待状が送られてきたことによる。8月4日18時30分～22時の陸上

競技をオリンピックスタジアムで観戦できとるので、JTB高知支店の瀧本課長に連絡し、オリンピックスタジアム近場のホテルの予約と青森旅行を計画してもらっていた。

ところがコロナの感染拡大が収まらないことから、東京に「緊急事態宣言」が発令され、無観客が決定された。

ホテルは、「三井ガーデンホテル神宮外苑の杜プレミアム」を予約していたが、高いホテル代を払ってここに泊まる意味が無い。「浅草ビューホテル」に変更してもらった。

私たちの部屋は、22階の国際通りに面したエグゼクティブツインルーム。窓の外にはスカイツリー、浅草寺本堂、五重塔、アサヒビール本社ビルなどが見える。ビューホテルと名前が付けられているだけのことはある。絶景に感動した。修学旅行の生徒たちが泊らせる西向きの部屋は、何も見えず、ガッカリすることになるようである。

大衆演劇と一緒に観ることにしている扶美枝さんがホテルに来てくれた。ホテル26階のスカイグリルbuffet「武蔵」でコーヒーを飲む。



ホテルの部屋から眺めた景色

5. 浅草の木馬館

浅草の「まるごとにっぽん」は無くなり、ビルの1階は「ユニクロ浅草店」に変わっていた。

いつもインバウンドで賑わっている大衆劇

場「木馬館」の前の通りに、人出はほとんど見られない。土産店の多くはシャッターを下ろしていた。東京オリンピック開催期間中とは思えない静けさであった。

8月の木馬館の公演は「橘劇団」。演目は毎日変わっている。今日は、尾崎士郎作の「人生劇場」。やくざ飛車角と吉良常を中心とした義理と人情の物語である。これまでに観た演劇の中では一番良かった。

20時30分の終演後、コンビニで食料を買ってホテルの部屋で食べる。ベッドの窓から見えるスカイツリーは、五輪の5色にライトアップされて、とても綺麗であった。



5色にライトアップされたスカイツリー



シャッターを下ろした土産物店



人が多いのは浅草木馬館の入り口だけ

6. 東北新幹線「はやぶさ13号」

東京駅9時36分発の東北・北海道新幹線「はやぶさ13号」で青森へ向かう。所要時間は約3時間。

私たちが乗ったのは、先頭車両のグランクラス。飛行機のファーストクラスに相当する。座席は18席しかない。乗客は、私たちを含めて3組だけであった。

一度でよいので、贅沢な飲食のサービスを経験したいと思って予約したのであるが、サービス係がコロナに感染してサービスを中止しており、再開は明日からとのこと。残念である。



はやぶさ13号の先頭車両はグランクラス専用



先頭の 10 号車はグランクラス専用車両



グランクラスの座席はゆったりしている

7. 三内丸山遺跡

12 時 34 分、新青森駅に到着。改札口で北星交通株式会社の乗務員の船引章世さんが出迎えてくれた。私より 2 歳年上の 73 歳。3 日間、黒塗りのハイヤー「クラウン」で観光地を案内してくれる。

新幹線の中で昼食をとれなかったなので、駅のコンビニで握り飯を買い、ハイヤーの中で食べる。

新青森駅から特別史跡三内丸山遺跡(さんないまるやま)までの距離は 2.5 キロ、車で 10 分であった。

三内丸山遺跡は、紀元前 3,900~2,200 年の縄文時代前期~中期の集落跡である。1992 年

(平成 4 年)から始まった発掘調査でたくさんの竪穴建物跡や掘立柱建物跡、多量の土器や石器が見つかった。2021 年 5 月には、三内丸山遺跡など「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された。



三内丸山遺跡・縄文時遊館の入り口



復元された竪穴建物(たてあなたてもの)。地面を 50cm ほど掘り下げて床を作り、柱を斜めに立て、屋根をかけている。屋根には茅葺き、樹皮葺き、土葺きがある。



掘立柱建物(ほったてはしらたてもの)



大型掘立柱建物跡。直径 2m の穴の中から直径 1m の栗の木柱が見つかった。



縄文時代の生活の様子



復元された大型掘立柱建物。発掘調査の成果や柱穴の底の部分にかかっていた土圧の分析結果などから全体の大きさを推定されている。屋根については様々な説があり復元されていない。



発掘された縄文土器

8. 八甲田ロープウェイ

定員 101 人のゴンドラに乗ると 10 分で田茂范岳(たもやつだけ)山頂駅に着いた。ここからは、八甲田山の山並み、陸奥湾、津軽・下北半島や津軽平野そして岩木山と 360 度のパノラマが眺められるはずであったが、生憎の霧で何も見えなかった。



集会場あるいは作業場として作られたと思われる大型竪穴建物。地面を 1.5m ほど掘り下げて床が作られている。



霧の中を登る八甲田ロープウェイ



霧に包まれた田茂范岳



復路のゴンドラ。定員 101 名であるが乗客は 8 人

9. 城ヶ倉大橋と地獄沼

国道 394 号の城ヶ倉大橋は、城ヶ倉溪流に平成 7 年に架けられたアーチ支間長 255m、橋長 360m の上路式アーチ橋である。

十和田八幡平国立公園内にある城ヶ倉大橋は、紅葉のスポットとして人気が高いが、残念ながら紅葉を見るには時期はずれであった。



八甲田連峰が一望できる城ヶ倉大橋



熱湯が湧き出ている地獄沼

ウェブサイトで「上路式アーチ橋としては日本一の長さ」と紹介されているが、それはこの橋が開通した頃のことである。日本一は、2011 年(平成 23 年)に開通したアーチ支間長 380m、橋長 800m の広島空港大橋である。

城ヶ倉大橋から八甲田ホテルへ向かって少し走ったところに地獄沼がある。車から降りると硫黄の匂いが鼻をついた。90° C の熱湯が毎分 2,700 リットル湧き出している。

10. 八甲田ホテル

八甲田ホテルは、原生林の中に建つ日本最大級の洋風木造建築の高級リゾートホテルである。ロビーや廊下の壁面には、棟方志功の書や水墨画が飾られていた。

私たちは E 棟の一室に泊まった。部屋の 1 階は洗面所、トイレ、風呂場、2 階が居間、3 階



棟方志功の水墨画



棟方志功の書

が寝室になっていた。夜中に何度もトイレに立たなければならない者には使い勝手の悪い構造である。

翌日の16時より会社の幹部会議がある。ホテルからオンラインで参加することになっている。持参したノート PC を立ち上げ、VDI(仮想デスクトップ)に接続すると、会議用の資料が、サーバー内に保存されていた。A4 サイズで36ページ分のデータをUSBに取り込み、それをホテルのフロント係に頼んでプリントしてもらった。カラープリントであるので、コンビニでコピーすると1,800円になるが、代金は請求されなかった。さすが高級リゾートホテルだけのことはあると思った。

夕食は、フランス料理のフルコースであった。メニューは、陸奥湾産ホタテ貝炙り、下北半島風間浦産の生ウニと野菜ジュレ、フォアグラポワレ、リンゴタルト添え、ヴィシンワーズ、深

浦産甘鯛ポワレ、倉石牛フィレ肉網焼き、そしてデザートはピーチメルバであった。

JTB の瀧本課長からワインの差し入れがあった。家内と二人で飲んだが750mlは多すぎた。勿体ないと思ったが1/3は残った。

久しぶりに本格的なフランス料理のフルコースを堪能することができた。



最初のオードブルは生ウニと野菜のジュレ(ゼリー)。



出発前の八甲田ホテル



八甲田ホテルの入り口

11. 睡蓮沼

奥入瀬に向けて国道 394 号を走る途中で、睡蓮沼に立ち寄った。この湿原にはスイレン科のエゾヒツジ草が自生している。

睡蓮沼の奥に八甲田連峰が見える。天気恵まれたので、石倉岳(1,202m)、硫黄岳(1,360m)、大岳(1,584m)、小岳(1,478m)、高田大岳(1,552m)を一望することができた。



睡蓮沼と八甲田連峰。右端の山が高田大岳

12. 奥入瀬溪流

奥入瀬(おいらせ)溪流の散策コースは、焼山(やきやま)から十和田湖の子ノ口(ねのくち)までの 14km である。

散策コースの最下流が焼山で、そこに奥入瀬溪流館がある。溪流館でプライベートガイドの川村祐一氏と合流し、溪流館の中の展示物を見ながら奥入瀬に関するレクチャーを受けた。

奥入瀬は 76 万年前に八甲田カルデラから噴出した火山灰が堆積して圧縮・固結した溶結凝灰岩できている。溶結凝灰岩の台地が、十和田湖子ノ口の決壊による大洪水で浸食されて奥入瀬溪流が誕生した。

ガイドが運転するワゴン車に乗り、見所で降りて説明を聞いた。川村さんは電子工学科を卒業し、そちらが専門のようであるが、植物に詳しく説明も上手であった。半日コースは通常は 3 時間であるが、時間の都合があり 2 時間で案内してもらった。奥入瀬を満喫しようとすれば 6 時間の 1 日コースが良いようである。



「石ケ戸」。「ケ戸」とは小屋の意味。一件、コンクリート版のように見えるが、溶結凝灰岩。平滑な面は節理面である。溶けた凝灰岩が固結する際に収縮し亀裂ができ、それが発達して平滑な面になっている。



溶結凝灰岩に苔が生え、そこに樹木の種子が落ち、芽が出て樹木に成長する。樹木は岩塊を包み込むように成長している。



樹木の成長が節理面を押し広げている。自然の力の凄さを見ることができる。



「阿修羅の流れ」。奥入瀬を代表する場所。



「銚子大滝」。奥入瀬溪流本流にある唯一の滝。高さ7m、幅20m。石積でできた砂防堰堤のように見えたが、自然の滝である。



「雲井の滝」。滝の高さは20m。年中、水量が多い。奥入瀬の木はすべてブナなどの落葉樹。落ち葉が何層にも積み重なって保水層を形成しているため年中、水が豊富である。



奥入瀬は苔が美しい自然を育てている。ガイドからルーペを使った苔の観察の仕方を教わる。

13. 十和田湖遊覧船

十和田湖は20万年前の火山活動によってできたカルデラ湖である。秋田県と青森県にまたがり、周囲長は46km、最大水深327mである。日本の湖沼の中で、面積では12番目、深さでは田沢湖、支笏湖に次いで3番目である。

十和田湖は、高知市出身の大町桂月と深い関係がある。明治41年に十和田湖を訪れた大町桂月は、十和田湖の雄大さや自然の美しさに魅了され、当時まだ知られていなかった十和田湖を雑誌「太陽」で全国に紹介した。また、「十和田湖を中心に国立公園を設置する要請書」、「十和田国立公園期成会趣意書」を執筆し、昭和11年の国立公園指定に大きく貢献している。

12時30分「子ノ口」発の遊覧船で「休屋(やすみや)」までの50分周遊して、烏帽子岩、五色岩。見返りの松など湖畔の景色を楽しんだ。

定員804人の3階建て遊覧船の乗客は、私たち夫婦のみ。なんとも贅沢な船旅となった。

観光客が少ないのはコロナの影響である。10年前の東日本大震災後にも観光客が激減し、十和田湖畔にあった高級ホテルが何件も経営破綻した。今も取り壊している建物があると運転手の船引さんが教えてくれた。



定員 804 人の十和田湖遊覧船



下船した休屋棧橋



船内の乗客は私たち二人だけ。



火山活動で溶岩が柱のように固まり形成された柱状節理



恵比須大黒島。マツやキタゴヨウが自生している。

14. 大鰐温泉 星野リゾート界津軽

十和田湖から発荷峠(はっかとうげ)、かつて鉱山で栄えた小坂町を観光しながら、15時15分に大鰐(おおわに)温泉の「星野リゾート 界津軽」にチェックインした。

今日は16時から第一コンサルタツツの幹部会議がある。WEBで参加することにしたため、余裕をもってチェックインした。

iPadを使ってTeams meetingで参加したことで、リモートでなければ分からない問題点に気がつくことができた。何事も、反対側に立って見ることの大事さを改めて感じた。



部屋の和室でWEB会議の準備中

星野リゾートは、ホテル業界の革命児・星野佳路(よしはる)氏が社長に就任して急成長させた会社である。宿泊料が高額であるが抜群の知名度と人気を誇っており、一度は泊まってみていた。

宿泊した「星野リゾート 界 津軽」についてネットで調べてみた。人々が憧れる高級旅館「南津軽 錦水」であったが、バブルで大鰐市のスキーリゾート開発計画が破綻した影響を受け、経営難となっていたのを東京のファンド会社が買い取り、2011年から星野リゾートが委託運営しているようである。

ホテル内部のデザインや料理は、「錦水」のときと大して変わらないが、宿泊料は「錦水」のときの2倍ほど取っているようである。それでも客が多いのは、ブランド力と教育されたスタッフの接客力だろうと思った。

食事は大間のマグロや生ウニ、アワビなど最高の食材を使った会席料理であった。

食後、ロビーで津軽三味線全国チャンピオンの渋谷幸平氏と、渋谷氏から手ほどきを受けたスタッフによる津軽三味線のライブがあった。

背後の壁面を飾っている陶板壁画は、日本画の巨匠・加山又造作の「春秋波濤」である。



渋谷幸平と従業員による津軽三味線のライブ。背後の陶板壁画は、加山又造作の「春秋波濤」



弘前ねぶた絵師作の「ねぶた絵展示ギャラリー」



中庭のライトアップ



外の景気が見られる窓際の席で朝食。



大間の本マグロなど最高の食材を使っている。

コロナの影響で、どこの観光地もガラガラであったが、「星野リゾート界津軽」は満室であった。しかも客層が若い。30代と思われる女性グループ、30代のカップル、小さい子連れの親子の姿もあった。宿泊料は決して安くはない。それにも関わらず若い客が多いのは意外であった。

私の若い頃に比べ、日本が豊になった証拠だろう。



正面玄関先で記念写真

15. 猿賀公園と盛美園

猿賀(さるか)神社境内にある鏡ヶ池の蓮が見頃であった。見学したのは午前9時前であったので、花びらが開き始めたところであった。



鏡ヶ池の東に盛美園(せいびえん)がある。盛美園は、庭園、盛美館、御宝殿で構成されている。

庭園は、郷土の資産家の清藤(せいとう)盛美が、1902年(明治35年)に庭師の小幡亭樹を招き、9年の歳月をかけて完成させた武学流庭園の最高峰と言われている。

盛美館は、明治42年に造られた1階が純和風で2階が洋風の和洋折衷の造りになっている。

御宝殿は、清藤家の位牌堂として大正6年に

造られたものである。十畳の広さの堂内には、金箔に覆われた重層入母屋造りの唐破風の宮殿があり、大日如来像が安置されていた。堂内の天井や壁面、宮殿は金箔で覆い尽くされていた。壁面には、人間国宝の河面冬山が生涯をかけて作った蒔絵がある。

劣化を防ぐため、内部を公開する時間が決まっており、1回3分しか観賞することはできない。しかも内部は写真撮影禁止であった。



武学流の庭園



和洋折衷の盛美館



盛美館の1階は純和風



御宝殿の内部(盛美園のホームページより引用)



道路の片側には防雪柵が設置されていた

16. 中町こみせ(小見世)通り

「こみせ (小見世)」とは、建物の表通りに設けられた「ひさし」のことで、積雪時の歩行通路の役割を果たしている。青森県や秋田県では「こみせ」と呼ぶが、新潟県などでは「雁木」と呼んでいるようである。

黒石市中町には、藩政時代の「こみせ」がそのままの形で今に残っており、「日本の道百選」にも選ばれている。

商店街の屋根付き歩道は大概公道になっているが、この「こみせ」は、私有地なのである。



誰もが歩道として利用できる「こみせ」

17. 防雪柵

青森をハイヤーで走ると、道路の片側にいろいろな形をした防雪柵が設置されていた。冬の吹雪対策である。防雪柵には、その機能によって「吹きだめ柵」「吹き止め柵」「吹き払い柵」「吹き上げ防止柵」があるようである。

18. 斜陽館

斜陽館は、太宰治の父・津島源右衛門が明治40年(1907年)に建築した入母屋造りの建物である。1階に11室(278坪)、2階に8室(116坪)、宅地は680坪という豪邸である。

源右衛門は、小作人300人を抱える大地主であり、衆議院議員、貴族院議員のほか、金木銀行頭取、陸奥鉄道取締役などを務めた県内屈指の多額納税者であった。

太宰の死後、1950年に津島家はこの家を町内の旅館経営者に売却。太宰治文学記念館を併設した旅館「斜陽館」に改装して経営していたが、平成に入って経営が悪化。1996年に金木町が買い取り、1998年から町営「太宰治記念館『斜陽館』」として改装オープンしている。

建物の広さと贅沢な造りには圧倒させられる。

写真撮影禁止の文庫蔵展示室に、下記のような書が展示されていた。

叔母の言う

太宰 治

お前はきりやうがわるいから 愛嬌だけでもよくなさい。お前はからだ弱いから 心だけでもよくなさい。お前は嘘がうまいからおこないだけでもよくなさい。



斜陽館



囲炉裏がある部屋が二間ある



西洋風の豪華な造りの階段



応接間。仮眠用のベッドも置かれている。

19. 太宰治疎開の家

太宰治は昭和 20 年夏、本土爆撃の中を逃れて故郷の生家に身を寄せ、ここでたくさんの小説や随想を執筆している。

太宰治の仕事部屋が遺されており、「ここに座ると、文章が上手くなる」と言われている。

ここでは太宰治の作品やグッズを販売していた。この家のガイドをしてくれた 50~60 代の男性から、太宰治著の「津軽」を読むことを薦められた。旅の記念として購入する。



猫背に立て膝の「太宰スタイル」で記念撮影

20. 立佞武多の館

立佞武多（たちねぶた）館は、高さが 20m を越す大型の立佞武多を常設展示・保管し、制作スペースとすることを目的として 2004 年（平成 16 年）に竣工、開館している。

私が技建の鷺尾社長に案内されてここを訪れたのは 2004 年 8 月であった。二度目であったが、巨大な「ねぶた」には何度見ても感動させられる。

青森では「ねぶた」と呼んでいるが、五所川原や弘前地方では「ねぶた」と呼ぶようである。語源は「眠たい」だそうである。

立佞武多の館には、平成 30 年製作の第 21 代佞武多『稽古照今 神武天皇、金のトビを

得る』、令和元年製作の第 22 代佞武多『かぐや』、令和 3 年製作の第 23 代佞武多『暫』の大型のねぶたが展示されていた。

いずれも高さ 23m、重さ 19 トンと巨大である。毎年 1 基の大型ねぶたを製作し、新しい 3 基が常に館内に展示、保管されている。

展示室は 1 階から 4 階まで吹き抜け構造になっており、展示室外周を回るスロープでねぶたを鑑賞しながら 1 階まで降りる施設構成となっている。祭りの際にねぶたが出陣することから、展示室の壁の一部は高さ 23m に及ぶ可動壁となっており、展示室スロープの一部を跳ね上げることによりねぶたの出し入れを可能にしている。



令和 3 年に製作された大型ねぶた



平成 30 年に製作された大型ねぶた



大型ねぶたの内部構造

21. 鶴の舞橋

「鶴の舞橋」は、農業用ため池「廻堰大溜池（まわりぜきおおためいけ）」通称「津軽富士見湖」に、鶴田町のシンボルとして、平成 6 年に架けられた橋長 300m、幅員 3m の三連木造太鼓橋である。

津軽富士「岩木山」を背景にした舞橋の姿が、鶴が空に舞う姿に見えるとも言われ、また、橋を渡ると長生きができるとも言われている。

橋脚には、樹齢 150 年以上の直径 30cm の青森産「ひば」が 700 本使用されている。使用材料は、青森県産「ひば」1 等材が丸太 3 千本、板材 3 千枚（4LDK だと約 30 棟分）使用されている。総工費は 2 億 6 千万円。

観光客が年間 10 万人以上訪れる名所になっているが、建設から 25 年以上経って老朽化が



観光用に作られた鶴の舞橋



背後には岩木山が見える

進んでおり、大規模な改修工事が計画されているようである。

橋の入り口に、今年の春に立派な土産物店が開店していた。コロナの影響だろう、私たち以外の観光客は数名であった。

22. アップルロード

アップルロードは、昭和 54 年に建設された弘前南部広域農道の愛称である。弘前市前市石川と百沢を結ぶ約 22 キロの道路で、リンゴ出荷の際の交通渋滞を解消する目的としている。

道路の両側に延々とリンゴ畑が続いている。リンゴが真っ赤に熟れた景色は壮観だろうと思った。

弘前市のリンゴの収穫量は年間 16 万トンで日本一。市内には 6,000 戸のリンゴ農家があり、312 万本のリンゴの木を育てている。

無農薬自然栽培の「奇跡のリンゴ」で有名な木村秋則さんは、岩木山の麓でリンゴ栽培をしている。収穫量が少ないため一般の人は入手できとのことであった。

23. 岩木山神社

津軽富士とも呼ばれる岩木山(1,625m)は、津軽の人々の信仰の対象になっており、その麓には 1,200 年の歴史を誇る岩木山神社が創建されている。

一之鳥居の前に立つと参道の延長線上に岩木山が見える。



鳥居の奥に雲がかかった岩木山が見える



国の重要文化財の桜門

丹塗り(朱塗り)の「三の鳥居」をくぐると岩木山神社のシンボルとも言うべき桜門(ろうもん)があった。1628 年に建立された国の重要文化財に指定されている。

桜門前の左側の高欄には下向きの狛犬(こまいぬ)、右側の親柱には上向きの狛犬がいた。狛犬というよりも狛猿のように見える。

参拝を済ませて降りてくると、岩木山の山頂の雲が退き、鳥海山(ちょうかいざん)、岩木山(いわきさん)、巖鬼山(がんきさん)の三峰がはっきり見えた。



親柱と一体に掘られた狛犬



これから奥の拝殿に参拝する。



岩木山の山頂がはっきり見える

24. 弘前公園

船引さんの案内で東門から入ると、明治 15 年に植栽された樹齢約 140 年のソメイヨシノが現れた。ソメイヨシノの寿命は 60 年から 80 年とされているが、弘前公園には樹齢 100 年を超えるものが 400 本以上ある。



弘前公園最長寿のソメイヨシノ

弘前城には、外堀、中堀、内堀と 3 つの堀がある。はりまや橋を連想させるような赤い擬宝珠のある木橋が内堀に架かっていた。高欄には、「下乗橋」の橋名が書かれていた。ここで馬から降りて橋を渡るという意味。

本丸の東側の石垣の修復工事が行われていた。石垣が孕みだして崩壊の恐れがあるためである。その工事のため、石垣の隅角部に立っていた天守閣を本丸の内側へジャッキで曳家したと聞いて不思議に思った。一般に天守閣は本丸の真ん中に立っている。また、天守閣が 3 層造りであるのも不思議に思えた。

弘前城の歴史を調べて、天守閣の謎が解けた。高岡城(現・弘前城)が建築されたのは 1611 年である。京都で客死した初代藩主津軽為信の後を引き継ぎ、2 代目藩主の津軽信牧(のぶひら)が完成させたが、1627 年の雷火で 5 層の天守閣を持つ高岡城が消失した。



下乗橋



いかすみ石



内堀の石垣の修復工事



刻字隅石



曳家された弘前城の天守閣

武家諸法度により城を築くことが制限されていたため、高岡城は約 200 年も天守閣がないままであった。

9 代藩主寧親(やすちか)が 1810 年、蝦夷地警備の功によって、櫓移築という名目で幕府の許可を取り、隅櫓を改造する形で新築され完成したのが、現在の天守閣である。つまり弘前城

に現存するのは櫓であり、天守閣は存在しないのである。

修理している石垣から撤去した最上段の隅石と 2 段目の隅石が展示されていた。最上段の隅石は、イカの形をしているので「いかすみ石」と呼ばれている。石垣に「いかすみ石」が使われているのは、弘前城だけであろう。

2 段目に使用されている隅石は、間知石と同じ形状をしている。

工事看板に、「100 年前の大規模石垣修繕と天守の曳き戻しの完了間際に行われた地鎮祭の直前に石垣に刻字し積み直したものである」という説明があった。

現在修理がされているのは本丸の東側の石垣であるが、北側の石垣にも孕だしや、隅石が割れて突き出すなどの変状が確認された。

内堀の北側に架かっている木橋は鷹岡橋で、

親柱には「たかおかはし」と書かれていた。

昔、弘前は「高岡」とか「鷹岡」と呼ばれていたが、1628年から「弘前」に変わっている。1627年に高岡城が雷火で焼失したことから、地名を「前が広がる」という縁起の良い「弘前」に変更したものと推測される。

弘前公園は日本一の桜の名所として有名であるが、樹齢が200年を超える銘木も多い。

青森県出身の画家・棟方志功が「御滝桜」と命名した植栽1914年のシダレザクラ、枝が鶴の形をした樹齢300年以上の「鶴の松」、弘前城の御神木とされている樹齢220年以上のウジロモミ、樹齢500年以上のネズコ(ヒノキの一種)、幹周が5.73mで日本一を誇るソメイヨシノなどがある。



本丸から眺めた蓮池と岩木山。



本丸北側の石垣の変状



内堀の北側に架かっている鷹岡橋

25. 明治期の洋風建築

弘前公園近くの官公庁街には、明治期に堀江佐吉(1845-1907)が設計・施工した数々の洋風建築が保存されている。

堀江佐吉とは、代々津軽藩の大工棟梁を務める家に生まれた大工で、明治12年に函館で洋館建築の技法を学び、大工の神様と呼ばれていた。

佐吉が経営する堀江組は700人を超す職人を抱え、明治期に、津軽地方で数多くの洋風建築物の設計・施工を手がけている。

旧第五十九銀行本店本館

旧第五十九銀行本館は明治37年(1904年)に堀江佐吉の設計・施工で建てられた。ルネサンス期の洋風建築で、頂上には展望台を兼ねた装飾塔をつけ、その先端にはインド寺院に見られるような双輪を配している。国の重要文化財。



旧第五十九銀行本館

旧弘前市立図書館

設計は堀江佐吉。1906 年日露戦争の戦勝記念として竣工し、1931 年まで図書館として市民に開かれていた。

八角形の双塔を有する木造 3 階建てルネッサンス様式を基調としつつ、和風の建築様式も採用されている。県の重要文化財。



旧弘前市立図書館



寝室



書斎

旧東奥義塾外人教師館

東奥義塾は明治 5 年に開校した私学校。明治 33 年(1900 年)にアメリカの建築家が設計し、堀江佐吉が建てた。

2 階には、当時の寝室、子供部屋、書斎が残されており、外国人教師が如何に優遇されていたかがわかる。



旧東奥義塾外人教師館

ミニチュア建造物

旧東奥義塾外人教師館の建物の裏の広場に、14 棟のミニチュアの建築が展示されている。

鎌の看板が掲げているのは、明治 16 年(1883 年)創業の角弘金物店。第五十九銀行の創設者・大道寺繁偵ら民間資本家 15 人による「弘前農具会社」として発足。その後、弘前の「弘」と多角経営の「角」をとり、角弘金物店に名称を変更。現在は、年商 260 億円、従業員 320 人の総合商社「角弘」に成長している。

地域社会への貢献・奉仕を経営理念としていることが発展に繋がったものと思える。



14 棟のミニチュア建築



角弘金物店



角み呉服店

明治 26 年(1893 年)に建てられた「角み呉服店」は、3 階建ての洋館である。昭和になって閉店し、その後火災にも遭う。焼け残った建物はその後「豊田呉服店」、「弘前相互銀行」と変わっている。

26. 金剛山光明寺最勝院

最勝院(さいしょういん)は、弘前市銅屋町にある真言宗智山派の寺院。山号は金剛山、寺号は光明寺、院号は最勝院。五重塔は国の重要文化財に指定されている。



昭和 59 年建立の新仁王門



鐘楼堂の梵鐘(ぼんしょう)を撞木(しゅもく)で思い切り叩いて鳴らす。



津軽藩祖津軽為信が津軽統一の際に戦死した敵味方の大將士らを生かすため 1665 年に建立された。現在の五重塔は全面解体修理して平成 6 年に完成したもの。

27. 弘前について

弘前市の人口は 17 万人。青森市 28 万人、八戸市 23 万人に次ぐ県内 3 番目の都市である。

津軽為信が津軽を統一し、後に弘前となる高岡の地に町割りや新城の建設を計画した。城下町弘前が誕生したのは 1611 年、2 代藩主信枚(のぶひら)のときである。

1871 年(明治 4 年)7 月 14 日の廃藩置県で藩がそのまま県となり、青森県には弘前県・黒石県・八戸県・七戸県・斗南県が誕生したが、9

月 4 日に北海道松前地方の館県を含めた 6 県が合併し、新しい弘前県とした。しかし、直後の 9 月 23 日に弘前県は青森県と改称され、県庁も弘前から青森へと移され現在に至っている。

28. あとがき

青森を旅行したのは 2004 年以來であった。17 年前を振り返って見ると、2004 年 8 月 1 日に秋田空港からレンタカーを借りて家内の運転で、角館歴史村、田沢湖、八幡平、十和田湖、奥入瀬溪流、青森市内、ねぶた踊り、今別町、潮騒橋、渚橋、津軽半島龍飛佐木崎、ホテル海峡、青函トンネル、国道 339 号階段国道、中里町、津軽国定公園十三湖、立倭武多の館を 3 泊 4 日で観光して巡った。

十和田湖、奥入瀬溪流、立倭武多の館は、17 年前にも訪れていたが、湖遊覧船に乗っての十和田湖巡り、ガイド付き奥入瀬溪流巡りは今回が初体験であった。前回とは比較できないほど満足できた。立倭武多の館は、17 年前に比べて施設がずいぶんと充実したものになっていた。

観光地はどこも人出が少なかった。新型コロナウイルスが経済活動に及ぼしている影響は計り知れないことを改めて感じた。

「天气に恵まれる」「ホテルの設備やサービスがよい」「料理が美味しい」の 3 つの条件が揃った旅は楽しいといわれるが、今回の旅行はすべてに恵まれていた。

旅行期間中、日本列島の近くでは台風 9 号、10 号、11 号が発生しており、天候を心配していたが 5 日間とも快晴であり、思い出に残る素晴らしい旅行になった。